

第1回日本老年薬学会学術大会

ランチョンセミナー1

と き：平成29年5月14日(日) 12:00～12:50

ところ：都市センターホテル

病院薬剤師からみた ポリファーマシー対策の難しさ

—高齢患者に合わせた処方適正化を目指して—

【座長】



楽木 宏実先生

大阪大学大学院医学系研究科
老年・総合内科学 教授

【演者】



平井 みどり先生

神戸大学名誉教授
前・神戸大学医学部附属病院薬剤部長

ポリファーマシーに対する取り組み

ポリファーマシーとは、処方薬の数が多いことに加え、①潜在的に不適切な処方 (potentially inappropriate medications: PIMs) が行われている、②必要な薬が処方されていない、③重複処方されている状態と定義され、医療費増大のほか、死亡率の上昇、服薬アドヒアランス低下による治療の支障などを招きます。高齢者の薬物療法で問題とされる薬物有害事象増加の要因としてポリファーマシーがあげられるだけでなく¹⁾、私自身、大学病院で袋いっぱいの薬を持ち帰るたくさん的高齢者を見かけたり、処方薬が多いことによる医師・薬剤師の過重労働、薬剤費の縮小という病院経営面からの指摘などが、当院においてポリファーマシー対策に取り組む動機づけとなりました。

欧州で用いられている STOPP criteria を用いてポリファーマシーのひとつである PIMs を、特定の病棟における 65 歳以上の入院患者を対象に調査した 2014 年下半期の結果では、服用薬剤数が多いほど STOPP criteria 該当患者の割合が高くなる傾向が認められ (図 1)、STOPP criteria に該当する薬剤としては、非ステロイド性抗炎症薬

(NSAIDs)、カルシウムチャネル拮抗薬、ベンゾジアゼピン系薬、 β ブロッカーが多く、これらの薬剤が全体の 75% を占めていることが明らかになりました²⁾。現在、神戸大学病院では、STOPP criteria ver.2 を用いて PIMs のスクリーニングを実施しており、処方の中止・変更だけでなく、処方変更後の病態変化のフォローについても、担当医師と薬剤師が協働しながら (図 2)、「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン 2015」を参照して PIMs の検出に努めています。STOPP criteria ver.2 を用いたスクリーニング結果をご紹介しますと、やはりベンゾジアゼピン系薬や NSAIDs が多く検出され、45% の PIMs が処方変更または中止となりました³⁾。

こうしたスクリーニングから、高齢者では特にベンゾジアゼピン系薬の適正使用が望まれること、そして H₂ ブロッカー、マグネシウム製剤の使用には注意を要することが示唆されます。ただし、criteria に該当する薬剤があった場合にも即中止とするのではなく、患者さんの病態を十分に観察しながら処方の調整を行うことが非常に重要だと思います。

図1 服用薬剤数別に見たSTOPP criteria 該当患者の割合

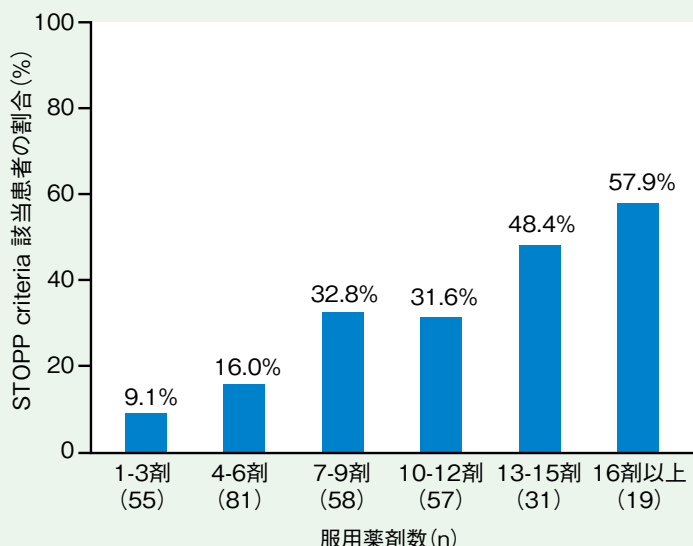


図2 薬剤師によるPIMs のスクリーニング・介入



ポリファーマシー対策に求められる コミュニケーション能力

一方、入院時に行った処方変更が、半年後の再入院時には元の処方に戻っていたといった事例もみられるように、ポリファーマシー対策には継続の難しさもあります。こうしたことの解決のためには、処方変更の根拠を示すこと、そして薬剤師が医師と協議できるためのコミュニケーション能力が必要だと考えます。医師への疑義照会に躊躇する薬剤師は少なくないと思いますが、処方変更提案は医師どうしであっても非常に気を遣うと言われています。次々と診察を行う中で、既に診察の終わった患者さんに対する疑義照会を受けるといような医師側の物理的、心理的状況を理解し、さらに医師の価値観、感情、解釈モデルを理解した適切な対応が求められます。

また、医師が処方箋を書く以前の段階、すなわち処方構築の時点から薬剤師が関わることも非常に重要で、そのためには薬剤師と医師の従前の関係構築がキーポイントになります。薬剤師から医師への働きかけとしては、共同研究の提案、薬剤師ならではの視点(強み)を生かした提案、例とし

て、どの薬剤を選択するのが適切かを明らかにするための、臨床研究の提案などが有効ではないかと思います。

連携の重要性

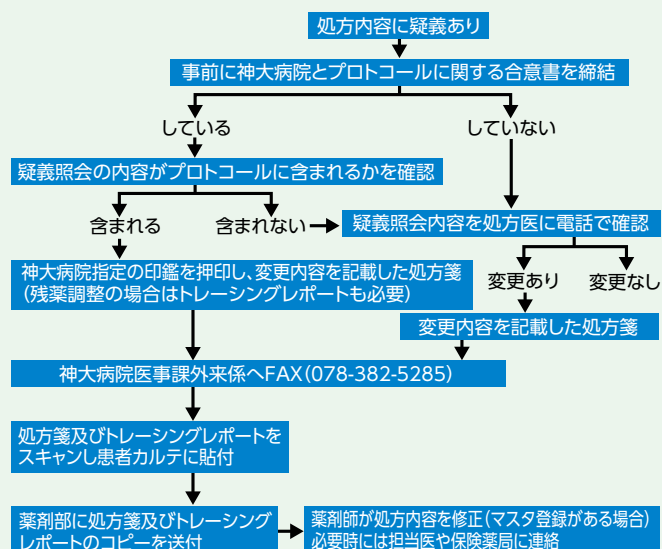
高齢者の診療において、薬物療法は頼らざるを得ない存在です。しかし、その適切な管理を医師だけが担うことには限界があり、様々な職種がチームとして患者を適切に治療し、院内だけでなく地域とも協働するという連携の取り組みが非常に重要となっています。神戸大学病院では、近隣薬局を対象に喘息治療薬の吸入手技や抗がん剤の調製に関する実習を行っているほか、院外処方箋に関する疑義照会プロトコルを定め(図3)、定型的な疑義照会に関しては医師への確認なしに薬局で修正を行い、後にトレーシングレポートで報告するという方法をとっています。医師からは業務の負担が軽減したという評価も得られており、多職種連携に基づく医師の負担軽減は今後もどんどん進めるべきではないかと思います。

ポリファーマシー対策における 薬剤師の役割

食習慣の改善や運動は病態の改善につながることから、これらの取り組みへの患者さんの意欲を引き出し、患者さん自身を治療の主体にすることが、ポリファーマシー対策のひとつになると考えます。しかし、例えば、減塩の効果には遺伝子型によって個人差がある⁴⁾ことも報告されており、薬剤師はこうした遺伝的な要因に関する知識を持ち合わせた上で、患者さんの指導や疾病の予防に取り組んでいくべきではないかと思います。

医学的エビデンスは絶えず更新され、常識は覆されていきますから、常に新しい考え方を理解し

図3 院外処方箋における疑義照会の流れ(神戸大学病院)



つつ、目の前の患者さんへの適応については、しっかりと目を見開いて対応していくことが重要です。総合診療医は高齢者から小児・妊婦までの診療にあたり、薬剤相互作用や処方カスケードなどの専門分化の弊害を解決し得る存在ですが、高齢者から妊婦までに対面する薬剤師にも、最も幅広く不適切処方を減らすことができる役割を担うことが期待されていると考えます(図4)。

ポリファーマシー対策には様々な課題がありますが、私自身は多職種が関わるこの取り組みを楽しくやるということを目標にしています。また、高齢化社会におけるポリファーマシーを考える上では、高齢者の健康に対するモチベーションの維持と、最後まで充実した人生を送るというエン

ド・オブ・ライフケアの視点が重要ではないかと思います。ポリファーマシーをひとつのキーワードとして、高齢者が輝く世の中を作っていきたいというのが私の願いです。

- 1) 日本老年医学会, 日本医療研究開発機構研究費・高齢者の薬物治療の安全性に関する研究研究班編. 高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015. メジカルレビュー社, 2015
- 2) 小倉史愛他. 医療薬学 2016; 42; 78-86
- 3) Kimura T, et al. J Clin Pharm Ther 2017; 42: 209-14
- 4) 眞田寛啓ら. 平成20年度助成研究報告集Ⅱ p99-107.
http://www.saltscience.or.jp/general_research/2008/200835.pdf

図4 総合診療医および薬剤師の役割

・治療も予防も

・高齢者・小児・妊婦も診る

・専門分化の弊害(薬物相互作用、処方カスケード、エビデンスなし治療薬、ポリファーマシー)を解決

総合診療医は最も幅広く不適切処方を減らすことができる！

→薬剤師にも同じ役割が担えるはず

担当者

学術情報に関するお問い合わせ

医薬品情報センター

☎ 0120-381-999

24H 365 DAY

副作用に関するお問い合わせ

安全管理部

☎ 06-6105-5816

沢井製薬株式会社

沢井製薬コーポレートサイト

<http://www.sawai.co.jp>

医療関係者向け情報サイト

<http://med.sawai.co.jp>